No.32
2004 Autumn

岡山大学 Okayama University
Archaeological research center Center report
埋蔵文化財調査研究センター報

# 装いの考古学

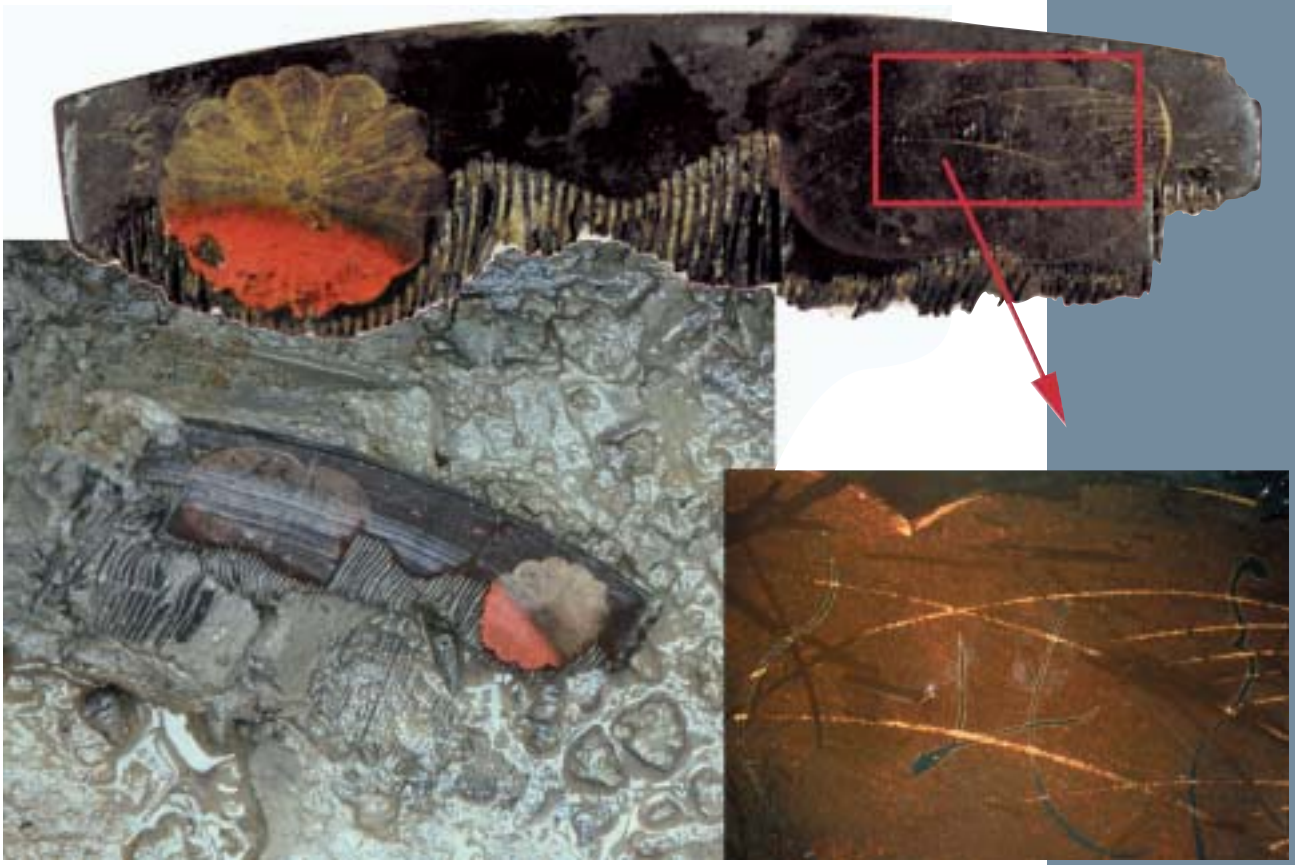
## 津島岡大遺跡、鹿田遺跡出土のアクセサリー

私たちは、なぜアクセサリーを身に着けるのでしょうか?おしゃれのため、自分らしさを表現するため、一種のお守りとしてなど、その理由はさまざまです。実は、日本列島に住む人々が身を飾るようになったのは、数万年前の旧石器時代からといわれています。当時は、石や骨、牙などでアクセサリーをつくっていました。その後、時代ごとにアクセサリーの種類や材質、着けることの意味あいは変化していきます。たとえば、縄文時代には、すでに私たちが思いうかべるアクセサリー、イヤリングやピアス、ネックレス、指輪、ブレスレットなどがそろっていました。また古墳時代では、社会の有力者たちが自分の力をほこるために、金、銀に輝くアクセサリーを身に着けていました。

このように、着飾る、装う行為には長い歴史があります。津島岡大遺跡や鹿田遺跡でも、いろいろなアクセサリーや顔を描いた土器が出土しています。今回はこれらの資料から、装いの歴史について考えてみようと思います。

（高田貫太）

津島岡大遺跡出土の指輪
（縄文時代　石製　径2.9cm）



鹿田遺跡出土の横櫛（左:出土状況　右:拡大写真）

# 縄文時代

*Jomon period*

## いろいろなアクセサリーの出現

縄文時代になると、土、硬玉、骨、牙、角、貝殻などで色々なアクセサリーをつくり、全身を着飾っていました。縄文人は、このようなアクセサリーを着けることで、男女の差や出身地、呪力の保持などを象徴していたようです。特に土製の耳飾りは、女性に一般的なアクセサリーで、耳たぶに径数cmという大きな孔をあけて着けていました。着けやすいように、耳飾の断面は三味線の撥（ばち）形になっています。津島岡大遺跡では赤く色を塗ったものや、表面に管状の工具で刺突して文様をつけたものが出土しています。

津島岡大遺跡出土の耳飾り
（縄文時代　土製　高さ右2.9cm）

また、漆を全体に塗った櫛も津島岡大遺跡で確認されています。つくられた当時には、華麗な装飾がほどこされた櫛だったと想像されます。漆のあつかいには豊富な知恵と高度の技術が必要で、縄文人がすでに漆を塗料として使いこなしていた様子がうかがえます。

津島岡大遺跡出土の漆塗り櫛
（縄文時代　長さ3.5cm）

さらに津島岡大遺跡では、石を加工してつくった指輪が出土しています（表紙写真）。これは、全国的にも珍しいものです。縄文人のあいだでは、指輪はそれほど流行していなかったようです。大きさからみると、子供用、または女性の小指に着けられたであろうこの指輪、はたしてどのような意味があったのでしょうか。

# 弥生時代

*Yayoi period*

## 玉と黥（いれずみ）

縄文時代からの風習が衰退し、中国や朝鮮半島から新たなアクセサリーが伝わります。その特徴は、色々な材料で同じ形状の玉類（管玉、小玉、勾玉など）を量産し、これを部品として組み合わせ、色々なアクセサリーをつくる点です。また、呪術的な意味合いに加えて、権力者が華麗なアクセサリーによって自らの力を象徴させようとするのも、死者をアクセサリーで装い葬る習慣も、この頃から一般化したようです。

津島岡大遺跡出土の
ガラス玉の拡大写真
（弥生時代　径0.4cm）

そのような新たなアクセサリーの代表例が、ガラス製の各種玉類です。弥生人はガラスのつくり方を習得し、自力で生産するようになります。鹿田遺跡では、地面に掘られた幅1m程の穴からガラス小玉とガラスのクズが出土しています。

鹿田遺跡出土の人面線刻土器
・目の下から頬に3条の入墨が施されている

もう一つ、弥生人は入れ墨をしていました。3世紀頃の日本列島の様子を記した中国の歴史書（『魏志』倭人伝）では、男が「皆黥面文身」をしていたとあります。「黥面」とは、顔の入れ墨のことで、鹿田遺跡では、入れ墨をした顔を刻み描いた土器が確認されています。一度ほどこすと消すことのできない入れ墨、弥生人はこれを魔除けや「われわれ」と「よそもの」を区別するためにもちいたと考えられています。

# 古墳時代

Kofun period

## 金銀へのあこがれ

津島岡大遺跡出土の勾玉
（古墳時代　メノウ製　長さ2.2cm）

権力者のための装身具が発達し、儀器化したアクセサリーが古墳に副葬される時代です。また、外見を重視した金・銀色にかがやくアクセサリーが、大陸・朝鮮半島から伝わるようになります。各地の有力者たちは、われさきにと朝鮮半島との交流を深め、この絢爛豪華なアクセサリーの入手に努めました。古墳時代後半をむかえると、小さい古墳からも金銅製の耳飾が出土するようになります。

一方で、伝統的なアクセサリーが消えていってしまうのもこの時代の特徴です。その代表例が勾玉です。勾玉は、縄文時代以来、日本列島の人々に好んで用いられてきたアクセサリーで、当時の人々は勾玉に特有の呪力をみいだしていたのでしょう。しかし、人々が金・銀に輝く外来のアクセサリーに目を奪われたこの時代に、数千年続いた勾玉はついにその呪力を失うこととなります。津島岡大遺跡では、古墳時代の後半頃につくられたと考えられる勾玉が出土しています。小型品で形状も単純です。良質のヒスイではなく、瑪瑙でつくられており、伝統的な呪力を失ってしまった勾玉の末路をかいま見ることができます。

# 古代・中世

Ancient, Medieval

## アクセサリーから衣服へ

古代以降、アクセサリーによって装う習俗は、長く姿を消すことになります。中国や朝鮮半島の制度の影響を受け、権力者を中心にアクセサリーのかわりに衣服とその色彩によって、身分を表示するようになったためとされています。また、このころには役人の職や位によって、腰帯（ベルト）の形式を細かく規定するようになります。鹿田遺跡からも腰帯にとじつける石製装飾が出土しており、当時の地方役人の存在を推定できます。

また、女性の髪形は垂れ髪にかわり、のちに黒髪を長くのばすことが美女の条件となるようです。そのためには、髪をすくための櫛が必要でした。このような櫛は、古代に中国から伝わってきたもののようです。鹿田遺跡でも、古代の井戸の中から横櫛が出土しています。その後、櫛以外のアクセサリーを着ける風習は、久しく途絶えることとなりました。

鹿田遺跡出土の横櫛
（古代　長さ5.5cm）

鹿田遺跡出土の石帯
（古代　粘板岩　長さ3.9cm）
・写真は裏面
・ベルトに綴じ付けるための穴が3ヶ所確認できる

# 近世以降

After Medieval

## アクセサリーの復活

江戸時代になると髪を結う習慣が定着し、鬢櫛（びんぐし）、かんざしなどのアクセサリーがもちいられるようになります。鹿田遺跡では、墓と推定される穴から近世の櫛が出土しています（表紙写真）。金蒔絵や朱・ベンガラ漆できれいに装飾された横櫛で、「よしのくゑ」と書かれています。これは、量産品の商品名であるようです（表紙写真の右下）。当時の鹿田遺跡は、城下町から少し離れた農村であったようで、墓に葬られた人物の身分は決して高かったとは思えません。しかし、このような飾り櫛を着けて葬られているということは、飾り櫛がそれだけ広く普及していた状況を示しているとみることができます。

明治時代に西洋の習慣を受け入れるようになると、ピアスやイヤリング、ネックレス、ブレスレット、指輪などのアクセサリーが復活し、装いの道具として広くもちいられるようになります。

## Column 1 海の向こうと・・・

朝鮮半島の耳飾り
（韓国慶北大学博物館蔵）

海の向こうの、朝鮮半島のアクセサリーが日本列島に大きな影響を与えたことは、みなさんご存知でしょうか。特に、弥生時代のガラスや玉類、古墳時代の金銀きらびやかなアクセサリーは、当時、朝鮮半島から伝えられたものです。日本列島の人々は、朝鮮半島から日本列島へと渡来してきた人々（渡来人）にそのつくり方を習い、自らのアクセサリーとしてもちいていました。また、アクセサリーで自らの権力や地位を示そうという意識も、朝鮮半島や中国から伝わってきたようです。

一方で、朝鮮半島（特に新羅）では、勾玉の原材料としてヒスイが好んでもちいられました。これは、新潟県西部の姫川流域からの産出品の可能性があり、朝鮮半島の人々もヒスイの神秘的な深い緑にあこがれていたのでしょう。このように、日本列島と朝鮮半島の人々は昔から交流を重ね、互いに装いの文化を育んでいきました。

## Column 2 よみがえる勾玉

勾玉は、縄文時代から古墳時代の数千年にわたって、呪的なイメージを保ち続けたほぼ唯一のアクセサリーです。しかし、古代以降には姿を消してしまいます。そして現在、いつの頃からか、ふたたび勾玉は装いのアイテムやお守りとして好まれるようになりました。アクセサリーショップでは、天然石でつくられた勾玉の姿をよく目にします。さらに、シンボルマークとして利用されることもあります。例えば、埼玉県の県章は勾玉を連ねて輪にしたモチーフです。また。お隣、韓国でも、勾玉をデフォルメしたシンボルマークを使っている会社などがあります。太陽と月をあわせた姿といわれる勾玉に、色々な夢や願いこめ、それを身に着ける人々の想いは、今も昔も変わりないことかもしれません。

アクセサリーショップで売られる勾玉
（倉敷美観地区にて）

## 第8回 岡山大学キャンパス発掘成果展

題　目：「土・技・心」
期　間：2004年10月26日（火）～31日（日）
時　間：午前10:00～午後4:30
（土・日は午後4:00まで）

埋蔵文化財調査研究センターでは、第8回発掘成果展を開催します。期間中は土・日も開催します。どなたでもご覧になれますので、ぜひ見学においでください。

## 編集後記

今回は、装いの歴史をふりかえってみました。そこでは、過去の人々がアクセサリーに込めた想いが垣間みえます。私たちが、博物館などで昔のアクセサリーをみたときに感じる、「わぁ、きれい」という驚きやあこがれに、それをさぐる手がかりがかくされていると思います。

（高田貫太）

■ 編集発行／岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
〒700−8530　岡山市津島中3丁目1番1号　TEL・FAX（086）251−7290
［ホームページ］http://www.okayama-u.ac.jp/user/arc/archome.html
2004年9月20日　発行